



第4回防災文化交流会「阪東太郎と人の暮らし」を実施しました（2024/11/30）

キーワード：水塚／板倉／関宿／利根川東遷／渡良瀬川／首都圏外郭放水路／地下神殿／防災まちづくり
場所：群馬県邑楽郡板倉町 他

2024年11月30日（土）は素晴らしい秋晴れのもと、防災文化交流会を開催することができました。JR古河駅に集合し、阪東太郎と呼ばれた利根川と防災への取り組みの一端を見学しながら会員の交流を深めました。足尾銅山の鉱毒問題への対応のために渡良瀬遊水地がつくられ、水害から命と財産を守る水塚が作られたことを学びました。水塚のある家に育ったボランティアガイドの方の案内で、2棟の現存する水塚の中を見学させていただき、賢く水と付き合ってきた文化的景観を体感しました。その後、川の付け替えでアクセスできるようになった三県境にもご案内いただき、川の歴史の理解を深めました。車中では、田中正三の闘いを描いた「辛酸」（城山三郎）の話題等、移動時間も車窓を眺めながら、充実した交流の時間となりました。

続いて訪れた関宿城資料館では、利根川の治水対策等についての展示を駆け足で見学し、最上階からの利根川の東遷の痕跡を確かめつつ、富士山と筑波山を眺めて、関東平野の雄大さを実感しました。大変短い滞在で、展示内容をじっくり読む時間が無かったことが残念でしたが、ガイドがついて展示説明があることで、防災教育の場として充実した場であるとの感想が寄せられました。

最後の目的地、首都圏外郭放水路、通称「地下神殿」見学は、120段の階段の上り下りの大変さが吹き飛ばすような空間体験でした。説明員の丁寧な説明で、水害を軽減する装置としての役割の重要性を理解しました。また同時に、地下神殿見学は受付開始から3秒で完売する人気見学コースがあるという話にも驚き、地下神殿空間ばかりでなく龍Q館2階の展示室から見える操作室は、ロケ地としても活用されていることを知り、水害への備えだけではなく、様々な形で私たちの生活にかかわっていることを知りました。

流域面積の広い利根川水系のごく一部を体験した一日でしたが、多くの人の苦勞と思いが交錯しながら、今の私たちの生活を支えているということを実感することのできる交流会でした。

（参加者からの感想）

「1947年のカスリーン台風の後建てられた（実際の水害では使われていない）水塚、揚船が残されていることに感銘を受けました。当時の経済状況をふまえても相当な投資だったのではないかと思います。個人（世帯）で行う災害への備えとして何ができるのか、どこまで行えるか考えさせられました。水塚や揚船は水害常襲地帯の災害文化（防災文化）として語り継ぐ価値のあるものと思うし、広く知られてほしいです。」

「行きたかった場所だったので、テンションあがりました！既に何度も使用されているのに、臭いがなかったのは不思議でした。首都圏の洪水被害を守ること、そして平時は見学ツアーや撮影などに活用、有事も平時も稼働できるというのはいいことだなと思いました。」



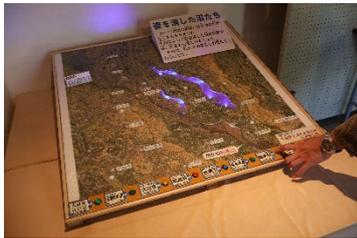
特定非営利活動法人 地域防災推進機構
Non-profit Organization for Action-oriented Disaster Risk Reduction



ボランティアガイドによる水塚の説明



三県境を体感する会員



かつての沼地を関宿城博物館で確認



地下神殿（首都圏外郭放水路調圧水槽）で語り合う会員



首都圏外郭放水路の操作室。トリプルウィングのロケにも？

文責：薬袋奈美子（副理事長）